

平成19年3月

谷口健次郎 学位論文審査要旨

主 査 村 脇 義 和
副主査 井 藤 久 雄
同 池 口 正 英

主論文

Rho-ROCK expression predicts the prognosis in patients with T3/T4 gastric cancer
(T3/T4胃癌におけるRho-ROCK発現は患者予後を予測する)

(著者：谷口健次郎、辻谷俊一、徳安成郎、奈賀卓司、建部 茂、近藤 亮、池口正英)

平成19年 Yonago Acta medica 掲載予定

審査結果の要旨

本研究ではT3/T4胃癌におけるRhoA, ROCK-1の発現を免疫組織化学染色にて検出し、臨床病理学的意義について検討、さらには再発形式との関連の検討も行ったものである。その結果、Rho/ROCK蛋白発現と臨床病理学的因子とのあいだに有意な相関は認めなかったが、リンパ節転移やリンパ管侵襲との間にはRho/ROCK蛋白発現する傾向が認められた。Rho/ROCK蛋白共発現群と非共発現群の間に5年生存率に有意な差が認められた。Cox比例ハザードモデルを用いた多変量解析の結果、リンパ節転移とともにRho/ROCK蛋白発現が独立した予後規定因子であった。さらに胃癌再発にて死亡した52例の再発形式とRho/ROCK蛋白発現との関連を検討したところ再発形式には有意な相関は認めなかったが、再発死亡に対してはRho/ROCK蛋白共発現群が有意に不良であった。本論文の内容は、Rho/ROCK蛋白発現が胃癌患者の予後予測に有用である可能性を示唆し、さらにT3/T4胃癌において予後を予測する上でRhoA蛋白発現とROCK-1蛋白発現との組み合わせが有用であることを示唆するものであり、明らかに学術水準を高めたものと認める。